

平成 28 年 1 月 28 日、政策秘書課職員との話です。

先日、松本市の菅谷市長と面会する機会をいただきました。ある方から、「松本市では、市長が方向性を示し、それを職員が形にしている。市長同志で意見を交わしてはどうか？」という紹介をいただいたからです。

松本市の菅谷市長は、医師出身の市長さんですが、常に職員に伝えていらっしゃるのですが、「現場が大切。とにかく、まちに出れば何かが見えてくる」「市役所の中だけでは進歩はしない。外に出て刺激を受けることが勉強になる」「職員には意欲、情熱、行動力が必要」と、私と共通する部分がたくさんありました。

菅谷市長から、「私も吉田さんも、以前の職場は、すぐ目の前に対象（患者、利用者）となる方がいらっしゃった。そこで働く人は、同じように目の前に対象者がいるので、私たちが言うことが、すっと胸に落ちる。一方で行政の職員は、対象となる人がすぐ目の前にいない場合が多い。行政は申請主義であり、法律と照らし合わせ、現場に足を運ぶことは少ない。市民の中に職員が入り込んでいないので、私たちが言う『現場が大切』がなかなか理解しづらいのだと思います」と伺い、職員のみなさんが、頭では理解できても、なかなか自分の中で消化しきれない理由が少しわかった気がしました。

菅谷市長は、「市長は方向性を示し、それを形にしていくのが行政職員の仕事」と言われました。

常に「市民主体」「一人ひとりに役割と居場所」と言っています。それを実現するために、まず職員のみなさんには、まちに出てほしいと言いつけています。

市長が「まちに出ろ」と言うから…という意識では、きっと何も見えません。なぜ、まちに出て、現場を見る必要があるのか、職員一人ひとりが、「なぜ」の部分をも自分の中に落とし込む必要があると感じます。

市では、多くの事業を行っています。日々の業務に追われると、当初の事業目的を忘れがちです。ましてや人事異動で人が変わっていくと、次に変わってきた人は、当初の目的すら分からなくなってしまうこともあると聞いています。

松本市では、各課で「市長が掲げる理念に基づいて、なぜ、私の課でこの取組

みをするのか」という資料を作って、視察等に対応しているそうです。随時、その資料を加筆訂正していくことで、担当する職員が変わっても、当初の目的から説明ができていると感じました。

松本市から戻ってきて、早速、私の考えている方向性を示す資料を作成するように指示しました。それを基に、各課にも作ってもらおうと思っています。資料を作ることを通して、それぞれの事業が、市長の掲げる理念とどう関係があるのか、当初の目的は何だったのか、改めて考えるきっかけになるはずです。

資料は、課の中の誰か一人が作るのではなく、課員全員で意見を出し合って作ってください。意見を出し合ううちに、互いに考えていることが違ったり、「そういう考え方もあるのか」という発見があったりするでしょう。そのときに「市長の言う、ここが分からない」と言うことも出てくるかもしれません。そうしたら、私とも意見を交わしましょう。そうしたことを繰り返しながら、職員のみなさんと、2050年に向かって、長久手市が取り組むべき方向を一つにしていきたいのです。

～市長の話を聞いて～

「上司に言われたからやる」という仕事のスタンスでは、結局、やらされた感で終わってしまいます。「なぜ、この仕事をするのか？」を理解して、自分で方法を考えた仕事の方が、そのやり方が効果的だったり、効率的だったりした経験があります。新しい部署に異動したとき、既に以前から実施されている事業だと、「前からこうだから」とあまり不思議に思わず、取り組み始めることも多かったです。

市長が言う資料を作るのは、実は面倒なことです。でも、資料を作成することで、目的を改めて認識するだけでなく、疑問が生まれて改善する部分が見つかるかもしれません。面倒ですが、そうした作業を重ねることで、自分のものになっていくのだと思います。もししたら、そうしたことが、「物語」なのかもしれません。